

# 発刊を祝して

秋田県立能代高等学校同窓会会長

田 中 仁 純



昭和4年に創設された能代高校硬式野球部のOBによって組織される「松陵会」が母校の創立80周年という記念すべき年に「野球史」を発刊されることは意義深いことであり、心からお祝いを申し上げます。また、この「松陵会史」に寄稿の機会に恵まれましたことは、この上ない光栄と感激致しているところであります。

能代高校硬式野球部は樽子山での能代中学、能代南高校、そして高塙グランドと母校部活動の中核的存在として、またスポーツの花形として在学生は勿論、市民の熱い視線を受け続けてまいりました。その勝敗の一喜一憂が多くの人々の心に響かせた長い歴史を有するものであります。

特に郷土を離れた同窓生の口について出る最初の言葉は「今年の野球はどうだ」であります。

昭和38年、創部以来苦節30有余年にしてつかんだ「甲子園」へのキップでありました。同窓会をはじめ多くの市民の熱気、それに物心両面にわたる援助と激励、やはり「甲子園だ」という大きな実像を見た思いであります。

甲子園の出場の陰には汗と涙で築いたOBの努力、学校、後援会の後押しがあってのことですが、やはり太田久君の功績であったと思います。

その後、52年、53年と連続出場をはたし、監督の地位を不動のものと致しました。その大監督を「太田君」と気安く呼ぶのは同期のよしみによるものです。私事になり恐縮ですが、太田君とは能代二中野球部の部室で会ったのが最初であります。太田君は強い意志と恵まれた体力で野球一筋の道を歩み、また家族も熱烈なる共同体としてさえたことは巷間すでに有名なことです。大学においては6大学にこの人有りと言われた、島岡監督の薰陶を受け全盛期の野球を学ぶ機会に恵まれたことも大いに指導するうえに力になったことと思われます。常に秋田市内の高校が独占していた甲子園への道に大きく立ちはだかった能代高校の存在は県内の野球を志す者に、暗闇の中の松明の光のように「やれば出来る」という勇気を鼓舞したことにも意義があったと確信致しております。その後、新監督のもとに平成4年、4回目の甲子園出場を果たしました。当時は創立70周年を迎える実行委員会を立ち上げようという時で大いにわいたものであります。「甲子園」に出場することから、甲子園でいかに勝ち進むかが話題となってきた頃であります。

硬式野球部は部活動の中で特別扱いを受けて来ました。しかし人口6万程度の県立高校で、軟式野球、バレー、そして戦前、戦後と制覇を続けた体操競技と全国優勝をなしとげたことは誇りに足ることだと思います。母校が創立80周年を迎えた今、もう一度甲子園への夢を咲かせてもらいたいものと熱望しております。そのためにも松陵会メンバーから次の指導者を育てていただきたいと願っております。学生の素質はその指導者の眼力で見出され、その手腕で育れます。母校愛に燃える情熱で後輩を指導育成し、それが連綿と続いていくことが栄光の歴史を作りあげると信じます。

校歌にもあるように「<sup>まね</sup>強き力を学びつつ」、そして「<sup>まな</sup>学びの道を究めよや」であります。良き指導者のもと、先輩から「<sup>まね</sup>学び」そして自らが体得して「<sup>まな</sup>学び」を究めた時、勝利の女神は微笑むのではないでしょうか。これから「松陵会」に課せられる命題は指導者づくりではないかと考えます。大いに期待したいところであります。

小理屈を並べたようですが、これも母校を愛し、野球部の益々の発展を願う気持ちの発露とご理解いただきお許しいただきます。

最後になりましたが、能代高校のさらなる躍進と共に野球部の活躍、そして松陵会の充実と会員のご健勝をご祈念申し上げましてお祝いのことばと致します。